

ハンターkorori、『海賊王の秘宝』を巡る冒険の記憶をここに記す。

12月5日未明、三人で身を寄せるテントに冷たい風の音が耳栓をものともせず耳に入ってくる。眠っているようないないような、そんな時間が過ぎていく。仲間たちはしっかり眠れているのだろうか。

外が明るくなり始めたころ、すっかりチームの料理人になったヤマパンの特性レトルトカレーが出来上がる。うん、美味しい。身体に染み込んでいく。

今日は海賊王の秘宝搜索の続きを行う。果たして見つけるられるだろうか。そして、他のチームの進捗状況はどうだろうか。気にはなるが、とにかく自分たちが秘宝を発見することだけを考えていこう。

昨日手に入れていた海賊王の地図を元に、初動の方針は打ち合わせ済みだ。昨日に引き続き機動部隊のヤマパン&ダイゴローのペアに秘密の頂方面の探索を任せ、自分は海賊のアジト周辺を担当する。昨日の食料探しとは異なり、見つけられるものを見つければいいというわけにはいかない。互いに明確な役割があり、その後はそれぞれ臨機応変に動く必要があるのが今日の搜索だ。Jランクハンターの二人には昨日以上の負担を強いることになるが、本人たちの口からは昨日以上の自信に満ち溢れた言葉が出てくる。彼らにとって未知の世界であった「宝探し」「謎解き」の要領が昨日でわかったこと、宝島の地理や陰しさが把握できたこと、そして何より「宝探し」の楽しさを感じてきたこと、なんだか嬉しいことを言ってくれる。

秘宝発見に向けて士気を鼓舞し、それぞれの探索へ向かう。

自分の初めの目的地は精霊の樹。昨日の探索で効率の良いルートは把握している。早々に到着し仲間からの連絡を待つ。仲間が暗証番号を回収する、そして自分がその暗証番号で宝箱の中身を回収するのだ。待っている間、昨晚からの懸念事項である解けていない手掛かりを考えるも、結局よくわからない。この後手に入れる情報が必要なのだろうか？

やがて仲間から暗証番号発見の連絡が来る。正直、想定していたよりかなり早い連絡だ。Jランクハンターたちは着実にレベルアップしている。

そうして当初想定していた手掛かりを回収し、次のことを考える。先程の懸念事項に関しては結局新たな情報は無い。これは今の状態で解けるものなのか。仲間たちには次の任務のために山頂へ向かってもらう。さて、自分は…結局山頂に行って合流するしか現時点ではできないことはないか。

死神の尾根に差し掛かり目に入ってくるのは秘密の頂を関する山の雄大さ。昨日同様少し心が折れる。ここでちょっと現実逃避。こちら側でやり残していることはないだろうか。で、刹那、…ん！？これは！なんだ、気付けば何てことないことじゃないか。そして向かうべき

先は…、山頂の手前！すぐさま山頂に向かう仲間の位置を確認。ちょうどその付近！ナイス！すぐさま新たな手掛かりを共有し、自分は踵を返す。まだこちらでやるべきことはあった。

これまで以上に道無き道を具体的な目標地点も定まらぬまま進む自分のルート、あの過酷な山頂までの道を行きさらに現地で考える任務を課せられている仲間たちのルート。それぞれの目標地点でそれぞれの目標物を発見し、それぞれの情報を合わせたとき意味深なもの目の前に現れる。禍々しい短剣？即座に仲間に共有する。返ってきた反応は「かっこいい」。まあ良い。

さて、問題はここからだ。これが本物の宝でないことはこれまでの情報から解読済みのつもりだ。周りの目を気にしつつ調べる、探す、試す。どういうことだ？状況を仲間に伝えつつ試行錯誤。わからない。ここでまだやるべきことがあるはずなんだけど…。発見は急に訪れる。溜まった落ち葉を掻きだしたのが契機。観察力大事だ。

新たに表れたのは黄金髑髏。…さて、これは？これまでの情報を振り返る、整理する、考える。見落としは無いか、使っていない情報は無いか、そして悔いは無いか？仲間に確認。「やっちゃえ」「いいっす。ビール呑みたい」…信頼してくれてるってことなのかな？正直現時点で自分にできることはない。やるのであれば早いに越したことはない。ええい、ままよッ！発見報告ッ！

一気に霧散していくプレッシャー、そして一気に押し寄せてくる不安感。でも、もうどうしようもない。

仲間に安全な下山をお願いし、自分もアジトへ向かう。あれでよかったのか？考えれば考えるほど不安は押し寄せてくるが、もう後戻りはできない。誰もいないアジトで独り待つ長い時間。それを切り裂いたのは声を上げながら降りてきたヤマバンとダイゴロー。これはいい表情が撮れそうだとビデオを向けていた自分にお構いなしに飛びついてくる二人。

自分の不安をぶつけるも、返ってきた「楽しかった」との言葉にもう感謝せずにはいられない。後は天命に任せよう。

慰労を称えあったお昼の太陽の下、三人で缶ビールのプルタブを開けた。